

慶應志木会会報

慶應志木会(慶應義塾志木高等学校同窓会)

1993(春・夏号)



•vol.9

SHIKI

2nd総会開催

平成4年11月29日(日)
京王プラザホテル(新宿)



会長あいさつ



桜井会長

只今ご紹介に預りました桜井です。

慶應志木会会員の皆様には本日の第2回総会の開催についてご案内申し上げました所、年末を控え何かとご多忙にも拘らず遠路全国各地よりかくも多数ご出席を頂き、お陰様で盛大に総会が開催出来る運びとなりました。志木会世話人並びに幹事一同になりかわりまして厚くお礼申し上げます。

また、平素は志木会の運営につきまして格別のご協力ご支援を賜わり、高い席からではございますがこの場を借りまして心から感謝申し上げます。

さて、歳月の流れは早いもので当会も昭和63年に創設してからはや5年目を迎えており会員数も約9,000名となる大組織に成長してまいりました。

その間幹事、世話人の方々のご尽力、更には志木高歴代校長先生を始め諸先生方、事務局の並々ならぬご指導ご支援により、年2回の会報の発行、新たな名簿の作成、収穫祭におけるOBルームの開設、年度毎の同窓会に対する協力等をさせて頂き、会員相互の親睦を深めるべく活動してまいりましたが、その運営も着実に軌道に乗ってまいりました。

特に志木高卒業式の謝恩会には志木会代表者もお招き頂き、更には本年3月に第42回卒業式からは卒業40周年を迎えられた会員全員をご招待頂くことになりご招待に預かりました会員の喜び感激は現役卒業生を凌ぐものであったと思います。

この様な心のこもった学校当局のご好意ご配慮に対し、深甚なる敬意と感謝を申し上げますと共に、母校との絆はより一層深まりましたことを皆様にご報告申し上げます。

本日の総会においてはこの後志木会会則に則り若干のお時間を頂き、役員のご改選並びに会則の一部変更の議案をご審議頂きますが、我等の母校の志木校は来たる平成10年には隆盛のうちに創立50周年を迎えることとなります。

私は皆様との結束をより強固なものにし、お互いの発展向上はもとより、母校の輝かしい発展に寄与する志木会を目指して精一杯頑張っけてゆきたいと念願しておりますので尚一層のご協力を頂けますよう切にお願い申し上げます。

又、総会後の懇親会に於きましては石川塾長、鐵野志木高校長、服部連合三田会長にご出席賜わりご挨拶を頂くことになっております。

そしてまた恩師の方々、お世話頂きましたご関係者も多数ご出席頂いております。

時間の許す限りごゆっくりとご歓談を頂くとともに、福引抽選会等の行事にご参加頂き、又志木会オリジナルグッズの販売も企画しておりますのでお楽しみ頂ければ幸いです。

では最後に来たる志木高創立50周年には1万人を超す大組織になっております会員の皆様のご支援ご協力を得て志木高と共に発展向上してゆく志木会になることを念願すると共に、ご参会の皆様方の益々のご活躍ご健勝をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせて頂きまます。ご静聴ありがとうございました。

志木高同窓会乾杯の辞



慶應連合三田会
会長 服部禮次郎

本日は志木高校同窓会五周年記念の総会が、このように盛大にひらかれました、まことにおめでとうございます。さきほど石川塾長のべられましたとおり、志木高校は慶應義塾の一貫教育のうちで重要な役割をになっておられます。したがって、志木高同窓会も義塾社中の結束のうえで大切な太い柱のひとつなのであります。

慶應義塾の設置している高等学校は、塾高、志木高、女子高のほかに、まだ卒業生は出していないが、ニューヨークの慶應ハイスクールと湘南藤沢の高等部があります。ニューヨークの高校は、来年(1993)には早くも第1回の卒業生を送り出します。湘南藤沢のほうは、ことし一年生が入ったばかりですが、1995年には第一回卒業生がでることになります。さきほど、塾高同窓会の代表として平井さん、今井さん、女子高同窓会の代表として菅原さん、日下部さん、玉木さんが壇上で紹介を受けられましたが、志木高同窓会十周年のときには、ニューヨーク高校同窓会代表、湘南藤沢高等部同窓会代表も壇上に立ちならんで紹介を受けられ、ますます義塾社中の特色が発揮されるようになると思われまます。

それでは志木高同窓会のますますのご発展と皆様のご健勝をいのりまして、乾杯をいたしたいと存じます。ご唱和を願います。

“乾杯”

ありがとうございました。

第2回 総会式次第

第一部 総会式次第

事 項	登 壇	進 行
〔開 会〕	新保 堯司	吉澤 アナ
塾歌斉唱	多田 毅	
開会の辞		
〔総会議事〕	櫻井英太郎	吉澤 アナ
志木会長挨拶	//	
議長選出	龍野 和久	
役員選任		
会長承認		
副会長の紹介		
監事の選任		
会則の一部変更	//	
議事終了		吉澤 アナ

第二部 懇親会式次第

司会 吉澤アナ	
開 会 (来賓入場)	
開会の辞	吉澤アナ
塾長の挨拶	石川忠雄塾長
来賓挨拶	慶應義塾志木高校校長(志木会名誉会長) 鐵野 善資
日吉、女子高同窓会役員紹介	
乾 杯	慶應義塾連合三田会長 服部 禮次郎
懇親会 (ライトミュージックによる演奏)	
福引抽選 (K賞当選者へ吉澤アナからインタビュー)	
ご来臨恩師の紹介 (吉澤アナ)	
応援歌斉唱	応援指導部並びにチアリーダー
閉会の辞	吉澤アナ

第2回総会

風景



FROM SHIKI ●志木だより

卒業式・入学式

去る3月24日、第43回卒業式が挙行され、259名の新しい卒業生が巣立って行きました。進路についてみると、本塾大学各学部への推薦者256名(文・4、経・91、法・90、商・10、理工・34、医・7、総合・13、環境・7)、他大学受験による推薦辞退等3名(内1名東大理I進学)でした。創立以来の卒業生総数は9225名となります。卒業40周年のOB招待については今年度は第3期生で、現在消息確認の出来ている24名のうち5名の方々の出席がありました。引き続き4月6日には新入生255名を迎えて入学式が行われました。志願者総数2344名の中から選抜され入学したものの226名、塾内進学者29名(普通部3、中等部26)で、近年、塾内進学者が漸増しています。

生徒作品集『櫟』の創刊

生徒作品集『櫟』が3月末に刊行されました。B5版・95ページに創作(短篇小说)3篇、12日に行われた志木演説会での石川塾長の講演を聞いての感想文5篇、箱根研修旅行レポート3篇、国語・社会・理科各教科のレポートあるいは読書感想文など19篇、語学課外講座からイタリア語スピーチコンテスト参加作品1篇、ほかに口絵として美術作品(絵画、彫刻など)8点のカラー写真などが収録され、表紙デザインやカットも生徒作品によりまとめられています。本校としては新しい試みで、必ずしも準備期間は十分ではなかったのですが、多彩な内容の作品集が出来上りました。

誌名の『櫟』は構内に数多くあり、すでに巨木の域に達したものも多く、新緑の頃から冬の落葉まで志木に暮らす者にとって常に季節の移り変わりを知らせてくれる身近な存在としてのけやきの木からとられました。また大地にしっかりと根を下し、天に向かって枝葉を大きく広げるその姿から、志木高のキャンパスに育つさまざまな可能性を象徴するものとしての意味をこめた命名でもあります。今後の成長を期待したいものです。

教員室の異動

3月末日をもって建部勇之助、大館清次、宮下昭三の3先生が定年退職されました。建部、大館両先生は本校創立以来45年間、宮下先生は28年間の長きにわたり勤務されました。別掲のメッセージは去る12月に行われた志木演説会の折りに在校生にお話をされた記録テープをほぼ忠実に翻刻したものです。OB諸氏にも志木高と志木高生への熱い思いをこめられた3先生の心情を読みとっていただくと同時に、3先生とのそれぞれの教室での出会いを思い起していただけるものと思います。

4月1日付で国語科の武藤正弘先生が向う3年間の予定で日吉の高等学校へ移籍されました。また同じく1日付で、国語科・河野文彦、社会科・森岡崇、数学科・城石利恵、理科・三義英一の4人の新しい先生が専任として就任されました。

定年退職 3 先生の在校生へのメッセージ

『志木高生の三つのしあわせ』

建部勇之助

おそらくこういうかたちでの話は最後、最初で最後。今、(校長先生が)45年と言われましたネ。45年というのは長いんですよ。でもたってみると非常に短い。もう、45年もたつとあっちの部品、こっちの部品が痛んで来て、今日も本当は寝床からメッセージを出そうというふうに思ってたんですが、皆の元気な顔を見たくなって来ました。ちょっと風邪をひいているから聞きづらいかもしれないが勘弁して下さい。

45年前、思い出すとネ、いろんなことがあります。志木の人口が3000人。(笑声) それから学校の正門が、今のあれはあさひ銀行というのかな、元の埼玉銀行のところネ、あそこでした。駅から100m位なただけですごく道が悪くてネ、雨でも降るとネ、長靴はいて来たんですよ。都会からでしょ、生徒が来るのはだいたい。長靴はいて来るからすぐに志木の生徒だとわかってしまう。学校へ入るとネ、これは今でもまだ当時の面影が沢山ありますネ。森や林、あるいは柿畑の片りんがあります。それから畑、これは今グランドになっている。あれは全部畑だったんだからネ。それから牧場があった。牛や馬、豚、鶏、もう、のどかでネ。野火止の用水が流れているでしょう。毎日がピクニック。春になるとひばりがパーッとさえずりながら空に上っていく。君らはスカイラークなんかに行くんでしょうけどネ。秋になると柿がたくさん。今も沢山あるけどネ。その頃はみんな飢えていたからネ。スキがあるととっちゃおうとしてネ。君

らはいっぱいなっているけど全然とらないネ。おいしいんだよあれは。そういう状況、ちょっとこうそのときの状態を目をつぶって浮かべてもらいたいと思う。どんなだったんだろうとネ。けれども目をつぶると寝ちやうから目をつぶらないで結構です。

とにかく45年というネ、何はともあれたいへんな年数だネ。45年たってみたらそんなでもないんですが。いったいその間、俺は何をしていたのだろうかと思うネ。そう思っているといけないんだよ、君達は。僕はそう思ったんだ。ところがネ、ずっと感じていたことがある。それは今も同じ。それは今、君らは僕が思っているその中にいるんだ。それは君らは大へん幸せだということ、3つの幸せの中にどっぷりとつかっているということなんだ。

まず1つ目はあんなに素晴らしい自然環境の中で勉強できるということ。この素晴らしい自然環境はさはないネ。ただたんに広いとか緑が多いとかそんなことだけではないんだ。そんな所はどこにでもある。踏み切りの向うの学校にだってある。広いし緑もいっぱいある。でも質が違うネ。つまり本当に豊かな自然というのは生態系でいうと単純でない、多様化した生態系。我々は多様化した生態系の中でないと生きられない。今そういう反省があるでしょう。人の手が加えられると自然はみな単純化してしまう。学校の森もだんだんそういう傾向にある。でもくいとめることは出来る。君らはその中でまだ豊かだという、そういう表現の出来る自然の中で勉強出来るというのは

幸せですネ。まだこれは45年ずっと続いている。その証拠にはあれだけの面積の校内に今でも400種類もの植物がある。そんなに沢山の植物があるのを知ってるかい。ウソだと思ったら調べてごらん。本当なんだ。こんな所はめったにない。これは素晴らしいことだよ。こういう環境の中で勉強したことが今は気がつかなくとも、後で君らの中に自然に培われて君らを大きくしてくれるものだと思う。

それから第2の幸せはさっき桑原先生が言われたでしょう。出会いということ。君たちは素晴らしい仲間に出会っている。悪いことも良い事も一緒にしているでしょう。悪いことの方が多いかも知れないが。これから先も良いことも悪いこともみな一緒だネ。いやでも離れられない。この素晴らしい仲間たちを大事にしよう。裏切らないように大切にできあって行きましょう。これは一生君ら宝ですよ。

それからもう一つの幸せ、これは至極現実的なこと、入学試験がないことネ。みな大学に行かれる。これで皆駄目になるんだよネ。(笑声) 楽すぎるから。これはどうしてそうな

るのか良く考えて貰いたい。これを生かして行ったら素晴らしい人たちになれるはずだ。現にそういう人もいる。でも大多数の人はそうでもない。僕の予想からすると大部分の人が素晴らしくなるはずなんだけどネ。ですからその幸せを忘れないで、よく認識してどうしたらそれを有効に使えるか、それが課題ですネ。

今日、うしろからずっとみていて、この頃の志木演説会は良く聞いているなど思ったのネ。そのうちにあつと気がつくとジッと聞いている人と、ジット寝ている人がいるんだよネ。寝ていても良いけどさ、さわぐよりも。だけどああいう偉い先生がみえた時にはネ、何かを吸収しよう。何かないかなとネ、貪欲に求めて下さい。そういう態度を失わないで。これから将来、君らは前途洋々なんだからネ。どうしようといって、自分たちでどうにでも出来るのだから、ひとつそのつもりで頑張つて志木の伝統を受け継いで下さい。

45年間の僕の感想はひとつ、とにかく素晴らしい人たちが後を継いでくれているということです。どうもありがとう。頑張つて。

『三つのブロンズ像』

先程、桑原先生から「出会い」というお話がありましたね。今、お話のあった建部先生と私の出会いは慶應の入学試験のときから始まったのです。私の受験番号が60番、彼が59番で教室は当時新館といっておりました只今の第一校舎の101番教室。60人収容でしたので私が最後の列の一番前、その後にしたのが彼

でした。

合格発表の日三田の山に上って行くと彼が先に発表を見て帰るところで「合格していますよ」と知らせてくれました。それからの付き合いであります。(笑声)

一緒に入学し、慶應義塾にお世話になり、卒業後は同じ慶應に勤め、今また一緒に慶應

を去っていくわけで、これは出会いの中でも特に濃いつながりであったのではないかと思います。

昨年の暮、志木演説会の折に石川塾長が「慶應義塾と私」という題でお話をされました。

それを真似るわけではありませんが「慶應義塾と私」とはどのようになっているのかな、と思ひまして振り返って見ました。

昭和20年4月に入学しましたので今年で48年、ほぼ半世紀にわたるわけです。

その間、卒業年度の三田会、所属クラブの三田会、卒業後は地域の三田会、更に当番年度には連合三田会開催のお手伝いを通じ、多くの先輩、後輩とも出会い、色々な職業についておられる友達を得ることも出来ました。これは私の大きな財産であり、生涯おつき合いを続けて行きたいと思っております。やがて君達も卒業して塾員となられるわけですが何処かの三田会でお会いすることがあるでしょう。

さて、今日は志木高校にある三つのブロンズ像についてお話ししたいと思います。

まず、斜路を上っていき校舎に入りますとそこに福沢先生が座っておられますね。

今日は二月三日、福沢先生のお命日ですがもし今、福沢先生がお元気でおられたとしたらおいくつになられると思いますか。

先程の桑原先生のお話で1901年に亡くなられた、その時のお年齢が68才と伺いました。福沢先生の座像の台座にあるプレートを見ますと、先生の還暦のお祝いに社中の皆さんが拠金して作ろうという話がもち上がったようです。そして1891年から'93年にわたって像がつくられたと書いてあります。

然し先生は何故かこの像をあまり好まれなかった、そしてご自身でこの像を土蔵の中に仕舞われたという話であります。ですから、第二次世界大戦の戦災にあうこともなく、ま

た戦時中の金属供出の憂き目にも遭うこともなく、蔵の中でほこりを被っていたわけですね。作者は大熊氏広という方です。そして昭和44年に現志木高校の新校舎が完成した時に、初めて日の目を見、本校の一つの名物となりました。

先年、竹橋にある近代美術館で、明治時代の銅像を集めた展覧会がありましたが、その折、先生の像の出品依頼があり、約一ヵ月程志木を留守にされたことがあります。

さて、今年には1993年。先生の像が完成したのが1893年、丁度100年になります。そしてそれが先生の還暦をお祝いで作られたということですから60才を加えますと、先生がお元気でおられれば160才になられるということになりますね。

次に斜路を上るとき、その左側を眺めると、芝生の上にクローバーの花輪をかざして仔牛と戯れている「牧童」の像が見られます。これは武蔵野美術大学教授峯孝先生にお願いして作って頂きました。この像についてお話ししましょう。

私が慶應に学びましたのは戦争の末期、昭和20年からであります。昭和18年頃より慶應の内部に農学部を設立しようという気運があったようですが、戦争も激しくなり大学もどんどん短縮され、予科が3年であったものが2年半に、学部も同じように短縮され、学徒出陣により学生が次々と戦争に狩り出された時代でした。ですから、当時の文部省も軍部も慶應に農学部を作るなどという悠長な話を許可するわけもなく、学部の新設は罷りならんということで、然し農学部の中の獣医畜産科だけなら軍馬の養成に役立つということで許可されたようです。今ならジープやトラックで輸送されますが、当時は馬の背中に大砲の銃身や弾丸を乗せて運んだので軍馬は重要な労働力でした。そこでその馬の育成に役立つ

つ獣医科だけなら許すということだったようです。当時は理科系の学生には徴集延期が認められ、また獣医は軍の委託制度もあることから、私は獣医畜産専門学校に籍を置いたわけではありません。

然し、昭和20年8月には終戦となり、当時日吉で学んでおりました私どもは進駐軍に追い立てられるように9月の初めに日吉の郊外にある川崎市蟹ヶ谷という山の上にありました海軍の無線隊跡へ校舎を移したのです。

戦災や接収で校舎の2/3を失った慶應は戦後の経営難の時に金のかかる理科系の学部を新設することなどとても困難な問題でした。

昭和19年に誕生した獣医畜産科も24年には発展的解消ということで僅か5年間で閉校となってしまいました。ですから我々の仲間は1期生から3期生まで300余名の幻の学部となってしまったのです。しかし卒業後は三田の文科系学部に進んだもの、或いは獣医を開業して活躍をしている者もおります。その仲間たちが集い蟹ヶ谷三田会を結成し、塾の創立125周年を記念して最後の土地となったこの志木高校の庭に「牧童」の像を建立したのであります。

次に正門を入ってすぐ左側の所に松永安左エ門先輩の胸像がありますね。

終戦後間もない昭和22年に、塾の大先輩でいらした松永安左エ門氏のご自身が経営しておられた東邦産業研究所という電力関係の施設を、全面的に慶應に移管されました。

研究所と付属農牧場の施設約6万坪強の土地は、戦災や接収で校舎や土地を失った塾にとってはまことに有難いお話でした。

松永さんは電力業界の大御所、今でいうエネルギー問題の開拓者でいらした方です。当時、農村を電化しようというお考えで、稲の苗の生育を早めるための電気温床を作られたり、徒らに人手に頼っていた農家の仕事を電

気エネルギーを利用して、例えば井戸水を電気を利用して汲み上げたり、農作業を容易にする研究をされていたようです。そのための実験農場や、付属の牧場、それに果樹園、富有柿や次郎柿といった高級な柿の木が600本もありました。

抑々この土地は東邦産業という会社の創立30周年に当る昭和11年にこの志木に研究所を建てられたそうです。その時、この土地の地主さん達から1反(300坪)を100円の割で6万坪にも及ぶこの広大な土地を手に入れられました。戦争が激しくなり松永さんの農村電化の計画は一応成果を挙げましたが、次第に思うようにはいかず、農場も最後には手入れをしないまま放っておかれたようです。

終戦後、松永さんは小田原のお住いや、東京のホテル住いが多く、志木には殆どいらっしやらない状態でしたので「不在地主だから土地を元の地主に返せ」と迫られていました。それで松永さんは慶應に移管されたようです。松永さんの決断がなければ今日の志木高校は生まれなかったわけです。

当時、蟹ヶ谷の仮住いで授業を受けていた獣医科と、同じく戦災で日吉の校舎を全焼し溝の口で細々と授業していた工学部の電気科、応用化学科の一部が、昭和22年の末にこの志木へ引越して来ました。(その後工学部は小金井へ集結しました)

我々獣医科の3年生と2年生約200余名が、東邦産業の研究室を改造した教室で勉強が始まりました。1年生は新たに募集しなかったためおりませんでした。

しかし、新しい時代に則した農業人を養成しようという計画で、再び農学部設置の気運が生まれ、昭和23年より先ず農業高校がスタートすることになりました。

そこで私ども建部・高山・宮部(現体育会主事)の4人が、卒業後学校に残るように言わ

れ、近い将来農学部設立を夢見て、先ず農業高校の誕生に力を尽しました。

先程、お話ししましたように戦争末期は農場は放ったらかしになっておりましたから、農業高校の実習農場にするのに大変苦勞しました。砂漠のようになってしまった畑に関東名物の空っ風が吹くと一寸先も見えなくなるような砂塵の中で、四月の農業高校開設に間に合わせるため、年老いた馬の力を借りて開墾し、一反ずつの区画整理が始まったわけです。それに周辺の地主からは、慶應に移管するなら元の地主たちに土地を返せ、と迫られるし、また、当時東邦産業研究所には技術者養成のための各種学校が、東邦産業大学として付属しており、そこの学生は希望により慶應大学(日吉・三田)に横すべりで收容されることになっておりました。しかしそれを潔よしとしない連中が学生の中におり、これまた慶應に移管反対のプラカードを掲げて氣勢を挙げており、卒業したばかりの若い僕等には正に四面楚歌の感がありました。そのような中で兎に角、4月の開校に間に合わせるよう約4万坪の開墾をしたわけです。

昭和23年度は、獣医科の最後の学年3期生と、農業高校の新しい1年生が同時スタートしたわけです。

いざ開校しても畑は一応区切られたものの何も植え付けられておりません。そのような中で農業高校の1期生の諸君は、開墾、堆肥播き、夏は草との戦い、今考えてもゾッとするような農芸の時間を頑張ってくれました。

作物の種類も人間の口に直接入るものより家畜の飼料が多かったものですから、近所の農家の人たちも、慶應は何をやっているのかと、冷やかな眼で見ていたようです。

例えば、トウモロコシも大麦も青刈りと称して若い茎のうちに刈り取り牛の飼料にしてしまう、二番目が生えてくると、またそれを

刈る。一枚の畑を何回かに利用する。

そして今でこそ「無農薬野菜」とか「有機質の肥料で育てた野菜」とか、スーパーなどの特別なコーナーで売っていますが、当時から我々は化学肥料の速効性に頼っている農家に対し、そのような農法をしていると今に地力が減退する、地力を維持させるためには有機質肥料を施しなさい。それには農家が積極的に家畜を導入し、牛馬の力を利用して農耕し、牛乳や鶏の卵を、或いは豚を肥育して肉の生産を図り、農家に現金収入の道を増やす。

そして何より大きな目的は家畜から出る排出物を落葉や、藁麦桿などの農作物の残渣、道端の雑草などを積み、堆肥を作り畑へ還元する、即ち有機質肥料の基に家畜の糞尿を利用することを力説しました。

また、今の農業セミナーのようなことを教授の指導の下、近隣町村の公民館に農家の人人を集め、有畜農業のあり方を説いて廻ったこともありました。

このようなわけで初期の頃の農業高校の諸君は実に良く働いてくれました。ですから今でも彼らに逢いますと、関東十二鍬法(開墾の方法)、堆肥まき、夏の炎天下の草むしり、など苦勞話を懐しそうに話してくれます。

この様に君達の先輩、農業高校時代の諸君が頑張ってくれたお陰で、松永さんが慶應へ寄贈して下さった6万余坪の土地も、元の地主へ返すようなことをせずに確保することが出来たわけです。

志木高校になった昭和32年以降も週に2時間程、農芸の時間があり、自らの手で作物を作り収穫する喜び、自然に接し自然からいろいろのことを学ぶ、体験学習の時間が組まれていました。それも昭和39年の秋の収穫を最後に廃止され、時間割の上からも普通科の志木高校になったわけです。

しかし、今グランドとなっている所は、そ

の昔、君達の先輩が汗を流し、泥まみれになって耕してくれた畑であったところです。

あのグラウンドには多くの先輩たちの汗がしみ込んでいるわけです。

現在、君たちは方法こそ違いますが、あのグラウンドで汗を流し、身体を鍛え、苦しい難関を突破出来る強い精神力を養う場として大いに活用して欲しいと思います。無為に放置し、草だらけにしたり、再び砂漠のような土地にしないよう、先輩たちのご苦勞に思いを馳せ、有効に利用して下さい。

いま、建部さんの話の中にもありました。校内に多く残っている緑、この自然は、一朝一夕には作れません。生物の授業でも話したように「生態系の保全」ということは、昨今盛んに言われております。校内の自然林は言うに及ばず、緑の保護に心して下さい。

以上、お話し致しましたようなわけで、志木高校の今日あるのも松永安左エ門先輩のお陰であります。松永さんは何時も君達の元気な姿で登校される様子を見守っていて下さるわけです。

福沢先生の座像、松永安左エ門先輩の胸像、

そして明日に向って飛躍する若い君達を象徴する「牧童」の三つのブロンズ像についてお話ししました。

農業高校の校歌の一節に「若き命は緑の木立、のびゆく力ここにあり…」とあります。

お正月の輪飾に用いられます「ゆずり葉」という植物は、古い葉が枯れて落ちる前に次の若い葉が用意され、後にゆずっていくという意味だそうです。

我々が卒業、退職してもまた次には新しい力、若い力がちゃんと用意されております。

やがて君達も若い力となって後輩に立派に受け継いでいって欲しいと思います。

埼玉県に慶應が進出して来た第一歩がここにするされたわけですから、松永先輩に感謝するとともに、多くの農業高校からの若い先輩たちに対しても、どうか若い君達が立派に伝統を受け継いでいって下さい。

本日は、この3月をもって退職する私たちのために貴重な時間をさいて下さりまして、誠に有難うございました。

どうか、皆さんお元気で…。

『広さより深さ』——じっくりと考えること——

宮下 昭三

どうもこういう所で話をするのが一番苦手で、何度もお断りしようと思ったのですが、実は、風邪をひいて頭が痛いといって今日は休もうと思っていたんですが、どうも嘘を言うのも気がひけるので(笑声)、出て来たんです。

昨日もいやで今日のことを考えるとどうも

頭が痛いと思いながら、教員室の読書コーナーのテーブルの上にあった「アエラ」という雑誌をめくっていると、現代の高校生に売れる参考書というようなところがありまして、それを読んでみますと、まあ基礎的なことを書いてあるとか、字が大きいとか、薄いとか、やさしいとか、イラストが沢山入っていると

か、まあ売れる用件が書いてあるんですネ。その反対が重厚といいますか、字が小さくてがっしりしていて読むのに骨が折れるというようなことらしいのです。結局、現代のみんなの気持ちというか、この学校の生徒というわけではなくて「楽をして楽しみたい」こういう風潮だと。これは現代に始ったことではありませんで、うちの長男が今36くらいなんですけど、それが今はうちにいませんが、うちにいる時分にどうも楽しんでばかりいるという気がして多少小言をいうとですネ、どうも私の考え方と違うんですネ。それはまあ30近くとしが離れているという世代の相違かと思えますけど、その「アエラ」に書いてある楽をして楽しむ。その時ちょっと気がついたんですけど「楽」という字と「楽しい」という字が同じ字なんですネ。私はどうも「苦しい」ということと「楽しい」ということは物事の表裏一体となっていると思えるんですネ。楽しいこと、非常に美しく感動するなんていうことは、かなり困難といいますか努力といいますか、悪戦苦闘した時にそういったことを得られて、楽しいとか美しさに感動するなんていうものを、それだけを取り出すということは不可能なものだろうと思っていて、楽しいということと楽をして楽しいということではなくて、やはり苦しいということと楽しいということは切り離せない一体のものだということ。20年ぐらい前になりますか、倅なんかにそういうお説教みたいなことをいいますと、古いとかダサイとか言うんですネ。苦しみとか努力するとか根性などとすぐいうて言うんですネ。子供に言わせるとそういうことを美德とっていると、まあそういうふうにして批判するわけです。別に私はそういうことを美德に思っているわけではないんですネ。ただ、本当の意味の楽しみとかそういうものを得るためには悪戦苦闘のようなこ

とが伴うと言っているのですネ。それなしに楽しいとか美しさに感動することはない。もしあるとすればそれは程度の低い安っぽいものだと考えているのです。

数学なんかの場合ですネ。一番図形的なピタゴラスの定理、三平方の定理ですか。そういうものは非常に美しいと。これは直感的にもよく分かるし、その不思議さというのみなよく分かると思うんですネ。ところが代数系統になりますと、相当努力しないとその中に潜んでいる数学の構造的な美しさというのとはなかなか感知できない。しかし悪戦苦闘の末にそういうものにふれるというか、見えてくると、こんな美しいものが世の中にあるのかと、それを発見した人に敬意を表する以上にですネ、もともと数学の構造の中に持っているそういう美しさ、そういうものに感動するわけですネ。これは、世の中、まあ、自然も美しいでしょういろいろな美しいものもあるかも知れませんが、これ以上に美しいものはないんじゃないかというぐらい感動するわけです。

ただ、残念ながらこの頃年を取っていろいろなことをすぐ忘れてしまうので、そういう感動するというような所までの努力は続かない。非常に残念に思うんですが。皆若いんですネ。皆の年代で何かをこう深く考える、どんどん先へ進むなんていうことは問題ではないんですネ。数学は広さより深さだと思うんですネ。より深い所で認識する、そういうことが一番できる時代だと思います。また皆の時代に読んだ本というのは一生忘れられない。それが皆の年よりも10年あるいは20年ぐらいたってから読んだ本はすぐ忘れてしまう。今じゃ1週間ぐらい前に読んだのをちょっと仕事の都合でそこが読みつげなかったと、その次を読もうとすると前のことをすっかり忘れちゃっているという状態になって来たんで、も

うこの辺が定年だといつづく感じているわけです。皆若いんですから、物事を広く知る必要もあるかも知れませんが、分からない所はじっくり考えて自分の納得できるまでやってみるということに心がけてほしいですネ。

ここに立って皆さんにさよならして終りなんですけど、まだあとに1週間ぐらい授業があるわけですね(笑声)。ここでさよならしてあとの授業どうするのか心配しているわけです。まだやり残している所があって気になりますので、その辺はまだ終りじゃないんだ、まだ授業があるんだというふうに思っていたきたいと思います。

この学校に28年間お世話になってまあ皆がよく数学を理解するので幸せだったというふうにつくづく思うわけです(笑声)。皆アハハと笑いますが、それは嘘ではないんです。その前、12年間いた東京のある私立学校なんですけど、ほとんど理解しないんですネ(笑声)、数学を。それはまあひとつは小学校、中学校の時の積み重ねがないのだから止むを得ないという点もあるんですネ。そういう時代に、できない生徒をどのようにしたらできるようにすることが出来るかという各教科の研究が盛んでした。私もそういう空気にまきこまれて1題の問題を細かく分解してですネ、ちょうど親鳥が雛にえさをえるようにですネ。細かく切ってよく口の中で咀嚼して柔らかくしてやるというような、そんな方法で悪戦苦闘したわけです。ところが、1週間たってその所をやっているとすっかり忘れていたというようなことがあって空しい思いをして来たわけですね。それはさっき言ったことと結びつくんですが、何かをパターンというか型で覚えようとするからいろんなことが出てきちゃうんですネ。そうじゃなくて、その根本にある所まで、もうすこし、深さですネ、深い所で物事を考えるという態度が出来ないんで

すネ。で、この学校へ来てみるとそういうことがない。中学あるいは小学校の積み重ねは完全に出来ているわけですから、もし出来ないとすればなまけているだけなんですネ。ですから、自分で深く考えて理解することが出来るし、まあ、私も自分の授業を100パーセント理解して貰おうと期待はしてないわけです。極端に言えば2人か3人クラスで理解して貰えれば良いと思うこともあるわけです(笑声)。で、テストしてみると意外に出来ている。時々だまされたと思うこともある。分からない分からないと言うんで、問題をちょっと手加減してやさしくしてみると平均点が10点位すぐに上っちゃうというような具合にですネ。それくらいある意味で答案を見てなるほどよくやっているなと感心する。そういう時にああこの学校で教えていて幸せだったなあ実感するんです。これから皆まだまだ今言ったように若いうちは、読んだ本が永久に残るというようなことですから、時間を大切にしてください、物事を深く考えて欲しいということです。

この学校で28年いて何もまあ残すことはありませんでしたが、一つだけいいことをしたと思うことがあるんですネ。それは私がやめることなんです(笑声)。その後ですネ、素晴らしい新人が来る。もう少し話をしたいんですけど校長さんが紹介する前にとやかに言うのもなんだと思うのでそれ以上話しませんが、とにかく素晴らしい方がお見えになる予定で、それだけが私が残した一番良いことだというふうに思います。どうも長いことありがとうございました。さようなら。

同期会だより

7期 去る2月18日(木)の夕べ、銀座明治屋モルチエに於て、7期会有志23名が久し振り集まった。来賓として大館・建部・奥井の三老師を迎え、30数年前の昔にタイムスリップをしたり、関東十二鍬法だの堆肥のこと豚の去勢等等懐古談に花を咲かせ、時間ぎれになると二次会三次会と夜の更けるのも忘れ旧交を温めた。

当日は、地方からの参加もあり非常に盛会ではあったが、次回には温泉にでも泊りのんびりとやりたいと思うので、今回出席できなかった諸兄も是非楽しみにお待ちしております。

(7期 平澤壽朗)

10期 4月23日、新宿ワシントンホテル天津飯店で、このたび定年を迎えられた建部・大館両先生をお招きし、牛尾先生にもご出席頂いて同期会を開催した。浜松から参加の伊藤賀章君、中国出張から帰国したばかりの楠、齊木両君をはじめ、48名の同期生のほか、3月10日に亡くなった大須賀力君の兄上均氏(8期)が力君の写真を持って参加して下さった。久しぶりに参加の諸君のスピーチを中心に楽しい時を過ごした。

(幹事：荒木幸・馬場)

11期 平成5年度新年会が去る2月18日(木)18時より三越本店特別食堂にて先生7名、会員34名、合計41名が出席し盛大に行われました。

最後に全員肩を組みカラオケによる校歌斉唱でしめくり大変楽しい一時を過ごしました。出席者は右記の通りです。

(敬称略)

(恩師) 鉄野善資、野口福次、大館清次、奥井泰夫、建部勇之助、三谷和男、山田忠雄

(会員) 磯村、大海渡、大塚、片柳、川原、川瀬、木村(昌)、北村、栗原、鴻田、後藤、鴻巣、坂本、佐久間、高木、谷、唐須(教)、中西、西松、野村、橋本、服部(光)、服部(尚)、福原、細谷、馬淵、増山、深山、村木、森田、山中、山口(浩)、山口(磐)、吉沢

(馬淵記)

13期 昨年は大学卒業25周年記念として塾から招待を受けたり、11月には志木会総会が開かれたり、卒業以来再会したこともない同期の仲間とも会える機会に恵まれた。我々同期会も5年前に開催されて以来行われていません。今年は開催するべく準備しています。是非収穫祭、母校を見学しながら出席ください。詳細は別途ご案内致しますので必ず予定に組み込むこと。(千葉・清水)

●10月30日(土) 収穫祭当日 於；志木

以上

写真部OB会

2月6日(土)に高山、渡嘉敷、萩原三先生をむかえて、新生OB会を発会いたしました。1期より42期まで約50名が楽しい一夕をすごすことができましたが、これも名簿作成にあたり各期幹事の方々に大変お世話になりました。紙面を借りてお礼を申し上げます。なお来年は3月12日(土)夕方の予定ですので今回連絡もれの方(特に30期以後)は下記に御連絡下さい。

事務局 与野ハウスクリニック内

今村 たかし (14期) 048-854-5744

志木会レポート

・平成5年度役員について

先の第2回総会において櫻井会長の留任が決定いたしました。今後の慶應志木会につきましては、下記の役員を中心に運営していきますのでよろしくご協力願います。

平成5年度慶應志木会役員一覧表

- ・名誉会長 鐵野善資 (校長)
- ・会長 櫻井英太郎 (1期)
- ・副会長 多田 毅 (7期) 五老輝彦 (9期) 伊藤明治郎 (主事)
- ・監事 龍野和久 (1期) 菅原 武 (7期)
- ・幹事長 大谷 熙 (1期)
- ・幹事・世話人

期	氏 名 (*印世話人)					
1期	菊池誠之助	藤井 淳				
2期	* 佐藤弘司	鴻田一章	遠山正秀	浅川 浩		
3期	品川 仁	岩崎勝利	菅野光男			
4期	* 高橋公郎	立岡 進				
5期	* 寺嶋延行	宮田 勝				
6期	真野信裕	松本福太郎				
7期	鈴木正治	平澤壽朗				
8期	* 青木宏至	大須賀均	磯部和宏			
9期	* 久保田晃功	南部達雄	加島延夫	今村信男	志知英男	
10期	* 荒木幸生	馬場紘二				
11期	* 鴻田益孝	* 桜井 馨	馬淵祥宏			
12期	* 岡本 哲	* 大道賢二	* 伊藤清一	朝倉和行	黒崎明雄	
13期	* 千葉宗雄	清水武寿				
14期	百瀬大策	築山正俊				
15期	* 本橋重夫	* 小笠原準一	* 原田 薫	倉田伸二	大関和樹	* 鈴木祐一
16期	川端清治	松島茂樹				
17期	* 西村孝一	* 須永泰司	* 増山治一郎	莊 敬典	宗田文明	
18期	奥村一人	福島由明				
19期	* 中西廣策	藤本賢夫	二島洋司			
20期	光藤良次	福本博行	深尾邦彦			
21期	* 福地敏之	飯田光茂	* 飯島敏一			
22期	* 金子康雄	桜井造雄				
23期	* 牧野敏彦	佐藤信也	外山公夫			
24期	* 赤木 均	島影幸有	田沼 潔			
25期	高橋宣行	小川 洋				
26期	山崎嘉正	金子 泉				
27期	吉野幸宏	大山俊雄	* 轟 幸夫			
28期	大館 信	望月 一				
29期	木村尚行					
30期	岸田一男	木島一郎				
31期	内匠屋健	嘩道佳明				
32期	町野素久	横江資友				
33期	小玉 裕					
34期	奥山研一郎	山下 孝	宇賀神隆			
35期	* 山口一午	松島 修	業天浩二			
36期	石川公一郎					
37期	原田純一	鍋島康友				
38期	平尾圭一	大坪伸至	知久康成			
39期	* 丸山和紀	* 岡本健司	田中浩樹			
40期	* 井上晴生	税所篤史				
41期	鈴木 和	柏木 徹				
42期	小島 圭					

※連絡先 伊藤清一 (12期) TEL03-3432-1393
増山治一郎 (17期) TEL03-3502-9222

MESSAGE

- 先般、レストラン「味楽来」の案内文書が慶應志木会副会長（藤中泰三）名にて皆様のお手元に届いた事と思われまふ。また一部の方には同窓友の会名にて業種別同窓名簿に関する案内文書も届いていると思ひます。

本件に関しては慶應志木会とは全く無関係であり、大変遺憾に思っておりますが、同時に「味楽来」の件については退任したとはいえ副会長が関与していた事に関して深くお詫び申し上げます。

なお、今後同様の事がないよう対策を検討しておりますが、会員の皆様におかれましては、慶應志木会の活動とは全く無関係である事をご認識いただきたくお願い申し上げます。

- 新塾長に、四期十六年務められた石川忠雄前塾長に代わって、前経済学部長の鳥居春彦教授が選任されました。

*

*

*

- 平成4年度の慶應志木会の収支決算につきましては、5月11日(火)に開催されました幹事会において次のとおり承認されましたのでご報告いたします。

慶應志木会平成4年度事業収支		H. 5. 3. 31, 現在	
広告収入	10,452,111	名簿支出	
名簿収入	8,807,000	(1)テープ堀お越し	120,510
パーティ収入		(2)名簿印刷費	11,798,000
(1)事前振込 637人	7,624,000	(3)発送費用	2,800,000
(2)当日入金 193人	2,672,000	(4)連絡会議費	249,200
パーティ収入計	10,296,000	名簿支出計	14,967,710
祝儀	200,000	パーティ費用	
福引き収益	1,002,192	(1)京王プラザホテル	8,439,073
物販事業収入	2,728,960	(2)ウイスキー	230,400
ポラロイド写真収益	3,072	(3)イベント費	535,000
維持運営費	317,000	(4)ビデオ、写真	261,000
新人会費	1,195,000	(5)ホテル心付け	100,000
打上会費徴収	166,000	(6)ホステス代	638,600
ホテル支払い差益	55,330	(7)雑費<昼食費他>	324,838
預金利息	266,004	パーティ費用計	10,528,911
収入合計	35,488,669	物販事業支出	2,704,368
前期繰越金	15,424,343	事務局費用	
総計	50,913,012	(1)会報費	2,373,381
		(2)会議費	780,613
		(3)式典費	70,000
		(4)人件費	623,520
		(5)交際費	107,987
		(6)収穫祭	105,191
		(7)総会案内状	1,422,741
		(8)事務費	470,573
		(9)通信費	277,318
		(10)パソコン管理	172,311
		(11)振込手数料	31,724
		事務局費用計	6,435,359
		打上げ会	302,331
		寄付金	300,000
		支出計	35,238,679
		今期繰越金	15,674,333
		総計	50,913,012

慶應志木会会報 1993(春・夏号) ● Vol. 9
 編集・発行 慶應志木会(慶應義塾志木高等学校同窓会)
 〒353 志木市本町4-14-1

平成5年6月15日発行
 発行人 櫻井英太郎
 印刷 株精興社